

浄

monthly
JÔDO

土

11

November 2004



法然上人鑽仰会



昭和58年2月号



昭和58年3月号



昭和58年4月号



昭和58年5月号



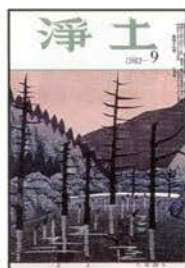
昭和58年6月号



昭和58年7月号



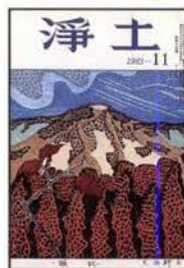
昭和58年8月号



昭和58年9月号



昭和58年10月号



昭和58年11月号



昭和58年12月号



昭和59年1月号



昭和59年2月号



昭和59年3月号



昭和59年4月号



昭和59年5月号

寺院紀行

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

東京・青山

梅窓院

青山通りから続く参道の奥の山門。
梅窓院詠唱会の講員と住職の記念写真



本尊阿弥陀如来像を納めた宮殿。天井絵は阿弥陀如来二十五菩薩の梵字で、螺鈿細工が施されている





開創以来の過去帳が残っている。
『梅窓院史』での貴重な資料となった

墓地とオフィスビルに挟まれるように
梅窓院ビルが建つ。本堂は階段を
上がった二階になる



江戸三十三観音札所の第二
十四番目の泰平観音菩薩像
を祀る観音堂は一階にある



墓地前の広場での郡上おどり。櫓にあがっているのは本場郡上の人たちだ。今年は港区長の挨拶もあった

長青山宝樹寺梅窓院第二十五世中島真成住職。
笑顔が印象的だ



本堂ビルから見る墓地。正面に東京タワー、右手は六本木ヒルズだ

浄土

2004/11月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京・青山 梅窓院	写真=タカオカ邦彦	1
インタビュー 負ける建築	隈 研吾	6
寺院紀行 東京・青山 梅窓院	真山 剛	14
会いたい人 木場勝己②	関 容子	22
日本酒のことば 日本酒のじかん	藤原理加	30
シネマ随想「約三十の嘘」	袖山榮眞	32
表紙のことば	石川忠夫	35
響流十方	小村正孝	36
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	40
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ『さっちゃんねッ!』	かまちよしろう	51
編集後記		52



表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

スペシャル
インタビュー

聞き手
本誌・平井泰代子

建築家

負ける建築 隈研吾

東京・青山にある隈研吾建築都市設計事務所屋上にて



東京・青山の梅窓院が、建築家隈研吾氏くまけんこによって新しく生まれ変わった。

隈氏はアメリカ帰りのポストモダンの旗手と言われていたが、近年は竹・木・石などを使ったジャパンモダンともいえる世界を確立し、現地の素材を生かした作品で数々の賞を受けている。

一部を紹介すると、一九九七年、熱海の「水／ガラス」Ⅱアメリカ建築協会ベネディクタス賞、宮城県の「森の舞台」（木造能楽堂）Ⅱ日本建築学会賞。二〇〇〇年、栃木県の「馬頭町広重美術館」Ⅱ村野藤吾賞。二〇〇一年、栃木県の「石の美術館」Ⅱイタリアの国際石の建築賞などである。

また、『新・建築入門』（ちくま書房）や今年出版された『負ける建築』（岩波書店）などの著作はベストセラーになり、多くの若い世代にも熱烈なファンがいる。

建築家として大活躍をしている隈研吾氏に建築についての思いを伺った。

梅窓院は、地下鉄の神宮外苑駅近くのビルの横から山門まで竹の参道を歩いて入る様になっていますが、青山という場所にとっても調和しています。この竹の参道

にどのような意味を込められたのですか。

梅窓院は、青山という地域において、シンボリックな存在なんです。

青山は東京の中でも研ぎ澄まされた閑静な所ですので、建築物も無理に装飾的にするのではなく、簡潔な、簡素な建築のほうが青山の閑静さに訴えるのではないかと思ひ、装飾のないシンブルな建築を考えました。

新しいお寺が、ビル of 陰になるといふのではなく、ビルが出来ることでお寺の環境の良さがより引き立つようにしたかったのです。そこで竹の参道を作りました。

竹の参道を歩いてお寺に行くことによつて、逆にビルがあることでお寺の神聖さがより強まるのではないかと考えました。

お寺といふのは、日本の都市の臍^{へそ}みたいな場所だと思つています。

ヨーロッパのカテドラルもヨーロッパの都市の臍になつています。その臍は表にあり、広場にさらされるように、剥き出しに建つています。

しかし、日本の臍は、奥まったところにあります。奥まつてゐることが重要で、賑やか

なところから少し引いた場所に、聖なる空間があると考えられています。したがつて、ヨーロッパのカテドラルとは、全然違ふ空間なので、絶えず「奥」ということを念頭に設計しました。

お寺といふ空間の主役は仏様と人だと思ふので、建物はむしろ脇役にして、極力、装飾を避けたいと思ひ梅窓院は白の壁を多くしました。

——信仰の場所が都市の臍になつてゐることが、日本もヨーロッパも同じであるとは面白いですね。アメリカのクローンビア大学に留学されていますが、アメリカと日本の建築に対する考え方に違いはありましたか。

まず、建築に対する評価の仕方が違います。アメリカの大学の授業は、建築のコンセプトを説明するといふことをとても大事にして

いました。図面が綺麗でなくとも、自分はこういう建築をつくりたいとプレゼンテーションすると、作品に哲学とか思想とかが深く感じられるものに、高い評価が与えられます。

一方、日本の大学では、プレゼンテーションのようなものはやりませんし、図面が綺麗に引けていれば、高い点数がもらえます。

もう一つは、アメリカでは、建築は思想という哲学だという伝統があるので、作品をめぐる教授同士がよく議論をしていました。

そうした背景には、建築についての教育システムの違いがあります。アメリカを含む諸外国の建築学科は、大学院にしかないケースが多いのです。学部で、社会学とか法律、美術等を学んでから建築を学ぶということになります。建築家は、医者とか弁護士と同じように、社会のことがわからないとできない職業だと考えられているからです。

しかし、日本の場合、建築は技術だと考えられてきた歴史が長いので、テクニクが評

価されます。日本の建築教育は依然として富国強兵の建築の考え方にあるからで、建築は社会を良くする技術だという考え方です。また、残念ですが、日本では、ほとんど工学部にしか建築学科がありません。

——今、話題になっています著書の『負ける建築』は、人を中心にした建築を目指して書かれているように思われましたが。

二十世紀の建築は、いわば「勝つ建築」で、人が暮らすことを優先にせず、周囲を圧倒した建築を目指した建築で、いまやその強さが疎まれるようになっていきます。

一方、「負ける建築」とは、弱く柔らかく、人が暮らすことを優先する建築をいい、周りの自然を引き立てたり、人に優しい建築のことです。建築とは、人の脇役でなくてはいけないと思っています。

日本の自然は優しい。木の姿も優しく繊細

なので、建築も弱く柔らかくしないと自然がよく見えなくなります。

— そういう意味では近年、日本の伝統素材である竹・木・石などを多く取り入れた『和』の作品が多くなっていますね。

東京を離れて地方で仕事をする事で、日本のすばらしい職人さんにたくさん出会ったことが、今の仕事につながっていると思います。

土地の職人さんたちと話し合い、現地の素材を使ってその土地でしか出来ないものを建築してきた結果です。

— 日本には、職人というすばらしい手の仕事を
する世界がありますね。

一方では最近お茶会などに参加する若い人たちの『和』に対する反応を見えますと、外国人と同じ反応をしているこ

とに驚かされます。

建築においても、日本から見た『和』ではなくて、外国から見た『和』の建築が多いような感じがしますが……。

僕はそれでいいと思っています。

『和』そのものも、時代とともに変化してきています。『和』というものが固定されたものではなく、それまであったものと、外から入ってきたものがミックスされて出来上がったものだと思いますので、若い人たちの反応は、そのプロセスの一部と理解できると思っています。

— 最後に建築家になろうと思われたきっかけをお聞かせください。

小学五年生のときに、東京オリンピックがありました。丹下健三さんの設計された代々木体育館を見て「建築ってすごいなあ」と思

った。そのときに丹下さん自身が建築されたものを説明しているのを聞いて、単に美しいだけではなく、背後に哲学があることに感動したんですね。それ以来、哲学をもって人間の空間を創造できる建築は、凄いと思っています。

今、東京は大開発の波が押し寄せて、超高層ビルが立ち並んでいる。そうした中、隈氏の基本理念ともいえる人間の空間を哲学する「負ける建築」が広がっていくことを期待します。



渋谷駅南口の壁面に雲を浮かべた

くま・けんご

隈研吾建築都市設計事務所代表。慶應義塾大学理工学部教授。1954年、神奈川県生まれ。東京大学大学院建築学専攻修了、コロンビア大学建築・都市計画学科客員研究員などを経て、1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。著書に「10宅論」（トニー・出版、ちくま文庫）、「グッドバイ・ポストモダン」（飛鳥出版会）、「建築的欲望の終焉」（新曜社）、「建築の危機を超えて」（TO TO出版）、「新・建築入門」（ちくま新書）、「反オブジェクト」（筑摩書房）など。





隈氏にとって寺院建築の第一号となった東京・青山の梅窓院

寺院紀行

東京・青山

梅窓院

撮影／夕力才力邦彦

文／真山剛



梅窓院本堂内陣

「江戸時代に幕府の後押しによって成立した檀家制度は、現在壊滅の危機に瀕している。これからの寺院は過去の遺産である檀家制度に依存することなく、多くの人の要求に堪えられるような寺が生き残っていくはずである」

東京・青山の梅窓院が念願の本堂復興を果たした。その落慶式が平成十六年十一月二十日に行われるが、その引き出物のひとつ、『梅窓院史』のあとがきにこの一文が記されている。

筆者である宇高良哲先生は大正大学文学部部長で埼玉十連寺の住職。専門は史学で、すでに何冊もの寺史を手掛けてこられている、いわば浄土宗寺院の寺史専門家だが、あえてこうした一文をあとがきに記したのはもちろん理由がある。一つには時代背景、そして一つには梅窓院が檀家だけに頼らない寺院活動と寺院経営に取り組み始めているからである。

江戸時代初期の寛永二十（一六四三）年、現在地に梅窓院は創建された。徳川家康に老中として仕えた青山幸成の菩提寺で、その戒名の梅窓院を寺名としている。そしてこの青山家の名前がそのまま地名になったのである。

そう、青山といえば東京のお洒落な街の代表だが、この名は梅窓院ゆかりの青山家からもらった名である。さらに遡れば青山家が青山を名乗るきっかけは、その先祖が京都から移住した新田荘（現群



国道246号線に面した梅窓院。その参道の竹林は一際目立っている

馬県吾妻郡中条村」の、松が生い茂る小山の名前、青山からとったもので、地名が人名になり、そしてまた土地の名前になったものなのである。ここまで覚えておくと、いま流行りのウンチクになるかもしれない。

さて、この超都心の寺院、東京・青山の梅窓院に目を向けてみよう。皇居からのびる国道二四六号線沿いには、国立劇場、いくつものシティホテルや大企業本社、それに老舗和菓子店、赤坂御所、大使館、神宮外苑などが並び、梅窓院もこの道路に面している。

十メートルもあろうかという孟宗竹が五十メートルも続く参道は、味気ないコンクリート建築の街並みにあって一際目を惹く。間口こそ広くはないが、一度見たら忘れられないたずまいである。

この参道の奥、山号である長青山の文字が彫られた額のかかる山門をくぐると正面にお花と線香を置く受付があり、その右手に墓地が広がる。二千軒にもなろうかという檀家さんの墓地で、今回の落慶に合わせ整備された。

墓地中央の白い参道には両側足元に洒落た照明が灯る。都心という場所柄か、夕方から夜にかけての墓参りも多く、そうした檀家さんへの配慮である。受付も夜七時半まで開いている。ちなみに整備に伴って新規墓地も分譲中だ。では、と価格を聞いてみたが、こちらもなるほど超都心価格だった。



都心のお寺だけに暗くなつてからの参りも多い。墓地参道を足元灯が照らしている

この墓地を左手に見て正面に本堂が聳える。まさに聳えるという表現がぴったりの現代的なビルである。寺院屋根をイメージしたアルミのすだれのかかった五階建てで、本堂の額や案内看板がない。聞けば建築家隈研吾氏の設計コンセプトからだという。都心ながら自然の香りが漂い心癒される参道と山門、そして、シンプルモダンの無機質な表情の対照は確かに際立ち、その存在感は否が応にも強まる。

その本堂の前にはかなり広い空間が広がる。毎年、青山家の地元である岐阜県郡上八幡の名物、郡上おどりが青山商店街の主催で開催されるが、その会場にもなっている。そしてこの広場から本堂へ続く階段となる。

二階の本堂、天井が高い。そしてビル内とは思えない木造の内陣に立派な宮殿が安置されている。仏具屋さんと螺鈿屋さんがプロデュースした仏具は、お檀家さんからも寄付を募り、塗り師、彫り師、彫金師といった京都でも指折りの職人さんがその技を駆使したもので、天井絵の螺鈿細工ともども一見の価値のあるものだ。依頼から完成までの期間はおよそ四年、時間も費用もかかっている。

さて、一階の観音堂には江戸三十三観音札所の第二十四番泰平観世音菩薩が祀られていて、ここは葬儀、文化講演会、春秋両彼岸の落語会場などになる。地下一階は各種教室に使われる講堂。地下二



墓地内にある最勝宝塔。地下は納骨堂になっている

階は祖師堂、正面壇上には法然上人像が祀られているが、舞台施設、音響施設も整ったホールで、着席で三百人が入る空間だ。

この祖師堂の入り口は青山通りから伸びるぼちぼち通りと呼ばれる小径に面し、正面入り口同様アプローチには孟宗竹の風情ある空間となっている。またホール周りにもゆったりとしたスペースが設けてあり、展示会場にもなる。この地下二階から地上二階までにはいくつもの客間があるが、特別なのが最上階の五階の客殿である。

新生梅窓院を設計した隈研吾氏は、今最も注目される建築家の人で、この梅窓院完成に伴ってマスコミに数多く取り上げられた。日経新聞の日曜版ではカラー紙面半分の大きな写真で掲載されたが、撮影場所がこの五階客殿横の屋上だった。

遠くに東京タワー、近くに六本木ヒルズや都営霊園の青山墓地、そしてカメラ視線の隈氏の足元はなんと一面の水。この写真、ご記憶の読者も多いのではないだろうか。ガラス張りから見渡す風景は、東京ならではの景色が屋上の水面に映る凝った作りである。

本堂上の三階は仏教研究所と書庫、四階は寺務所となっている。また隣接する住居棟には梅窓院所有の部屋がいくつかあり、随身（泊まり込みでお寺のお手伝いをする事）するお坊さんの宿舎になっている。

また墓地には納骨堂でもある最勝宝塔もたたずむ。そして今回の



祖師堂で行われたイベント、ダイアログ・イン・ザ・ダーク。祖師堂の看板の下に案内は「見えない。が見える」

本堂復興以前にその講堂を本堂として使っていた大正建築の無碍光会館。その屋上に梅窓院のシンボルとして聳えていた相輪も墓地内に飾られている。二千坪はあろうかという墓地には、もちろん歴代住職の墓もあるが、その墓より広いのが青山家の墓である。

百聞は一見にしかずでカラーグラビアと、この記事中の写真でご覧いただきたいが、こうした立地条件の良さや立派な建物だけが梅窓院の特徴ではない。こうしたハードを活かしたソフトもまた、梅窓院ならではの魅力なのである。

この七月から九月にダイアログ・イン・ザ・ダークという催しが祖師堂で行われた。まっくらな空間を聴覚や触覚など視覚以外の感覚で体験する展覧会で、主催はTBSラジオとダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパンだ。

青山という便利な場所の広いスペースが一般に開かれ、有効活用された一例である。また祖師堂のこけら落としでは平井丈一郎氏のチェロコンサート、文化講演会では北野大淑徳大学教授の講演会が開かれている。こうしたイベント的に使われる祖師堂に対し、ほどよい広さの講堂は外部に広く開放し、各種教室に連日利用されている。墓地前の広場が郡上おどり会場になることは前述したが、本格的な櫓が組みれ提灯がぶら下げられ、郡上八幡の名産品や長良川の鮎の塩焼き屋台まで出ることもあり、どこから来るのか多くの老若男

祖師堂のこけら落としは平井丈一郎氏のコンサートだった。写真はリハーサル



郡上おどりでは本場長良川の鮎の塩焼きが人気だ

女が集まり二日間の盆踊りも大いに盛り上がる。また、昨年から復活した十夜法要では法要後の芋煮会場にもなった。

そして、参道の竹林は女性誌等の撮影希望が今も後を絶たない。完成直後には一青窈の写真集のロケ場所にもなった。

とにかく梅窓院は話題にこと欠かない。

しかし何より大切なのはこうした行事がお寺主催だけでなく、地元商店街や外部の主催であることだ。寺院の中からの企画だけでなく、広く一般社会からのニーズに応える。これこそ、冒頭にあげた一文の、多くの人の要求に堪えることに繋がっていくのである。

ちなみにこうした外部からの要求の窓口になっているのが、青山文化村という寺報などを発行している広報セクションだが、いわく単に場所を提供するといっても難しい問題が沢山ある、とのことだ。おそらく貸す側の意識と借りる側の意識に大きなギャップがあるに違いない。しかし、その差に気付いてこそ次がある。これからが楽しみである。

こうした社会との窓口としての境内活用はいまに始まった訳ではない。遡れば先代中島真哉第二十四世住職は宗教と医療の会の事務所に境内を開放し、先々代中島真孝住職の時は明治時代に大本山増上寺から移された慈忍室という学寮を引き継いでいる。その慈忍室は梅真会という学寮に形を変えたが、そこには全国の浄土宗寺院の

青山家の墓(右)と梅窓院歴代住職の墓



子息のお坊さん志願者が集まり、梅窓院から大正大学に通い僧侶資格を取ったり、梅窓院の寺仕事を手伝う。そして何年かして自分の寺に帰る。東京・青山にある梅窓院に随身する、これは地方の若いお坊さんにとっては魅力的に違いない。

ちなみに先々代中島真孝住職は浄土宗の宗門校である芝学園の校長や大正大学で教鞭を振るうなど、その教えに薰陶を受けた浄土宗僧侶、そして随身はもちろん、数知れない。あだ名は「空気エンマ」で、大きな体とその恐い顔からのあだ名だが、巨躯のDNAは孫である現住職に引き継がれた。

最後になったが、この本堂復興という大事業を成し遂げた中島真成現住職に締めくくってもらおう。

「梅窓院の特長はなんといってもこの青山にあることです。時代の大きな変化の中で街並は変わりましたが、創建以来この地を占める梅窓院は青山のシンボルであり続けています。最近では近隣以外の檀家さんが増えています。そこには地元の方々による長年のあと押しという基盤あってこそなのです。」

地元の寺、行き交う人の集う寺、そして檀家さんの寺、欲張れるだけ欲張ってみたい。そう思っています」

住職の大きな体がさらに一回り大きく見えた。（ルポライター）

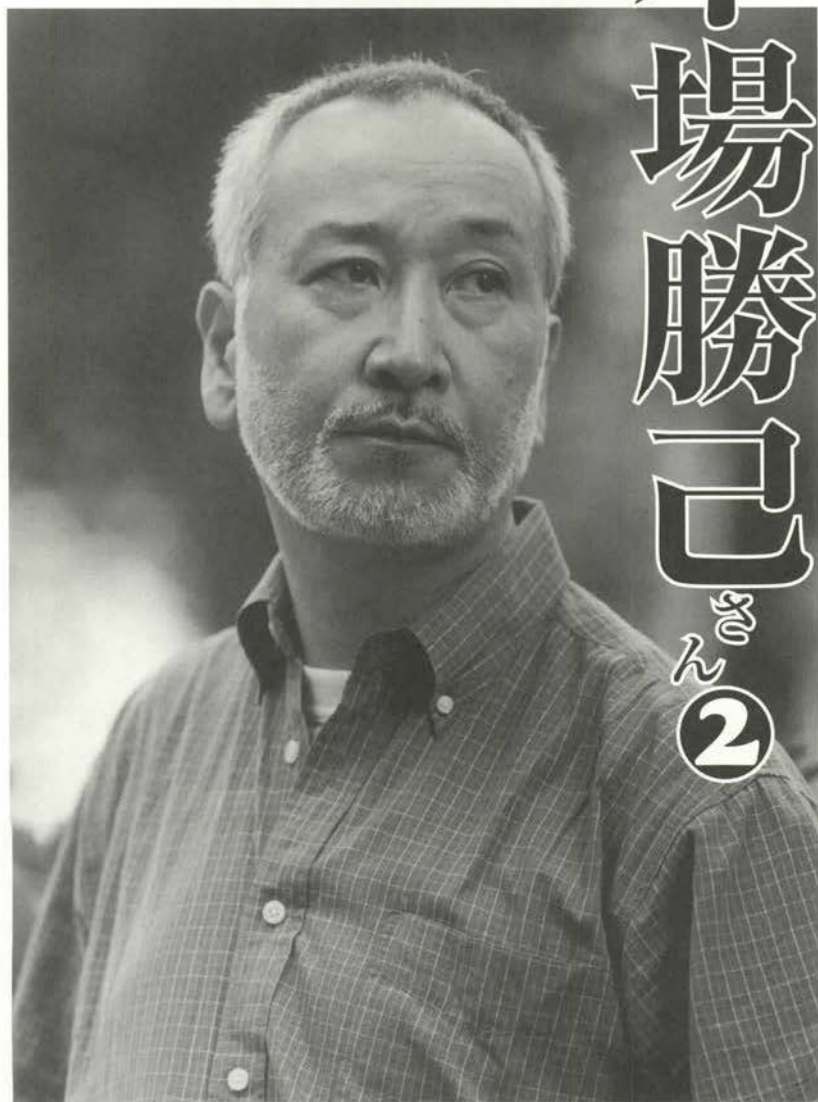


かつての梅窓院のシンボルだった無碍光会館。相輪は墓地に飾ってある

連載

会いたい人
関 容子

木場勝己
さん
2



木場さんが吃音障害から脱出できたのは、小学六年生のときに扁桃腺炎からくる腎臓病になり、学校を半年間休んでじつと病院や家にいる生活を送ったことによる。

「環境が変ったせいかもしれないのか治つてました。治つたら今度はその反動というか、敗者復活戦というか、突然おしゃべりに変身しましてね（笑）。子供のころからよく寄席へも連れて行かれて落語は耳になじんでましたから中学に入ると自分でもいくつか持ちネタができてきて、人前でよくしゃべっていました」

深川第六中学を卒業するころ、木場さんの一家は杉並区に移り、都立杉並高校に入学。このとき落語好きの生徒が集まって同好会を作る。

「この間、浅草の平成中村座に勘九郎さんの芝居を観に行ったら、どうもどつかで聞き覚えのある声が聴こえてきたんで、よく見たらすぐわかりましたよ。高校の一年後輩で同好

会のメンバーだった向井君が、歌舞伎役者になつていてびっくりしました。国立劇場の歌舞伎研修生から中村屋一門に入つて、今、中村勘之丞という名前なんですね。お互いにやっぱ芸ごとが好きで、こうやって同じような道を歩いているんだな……という感慨がありました。あのころ、同好会ではそれぞれみんな芸名をつけるんですが、彼は成亭馬久。『酢豆腐』とかに登場するおつとりした若旦那なんか、とぼけたいい味を出してましたね。ぼくの芸名ですか。貧乏亭いちろう一六（笑）。

一六銀行（質屋のこと）から取りました」

木場さんの祖父は歌舞伎や寄席が好きな風流人。義太夫も語つたそうで、へ三つ違いの兄さんと……と、『壺坂』を気持ちよさそうに語っている録音も残っているとか。木場さんが舞台人になる素地は、十分にその家庭にあったと言える。

「親父の妹はどういう事情でか深川から芸者に出ていて、のちに引かされて鳶職と一緒に



都立杉並高校の、落研時代。
高座での木場勝己さん

なったんですけど、この義理の叔父さんという人が吃音でした。しかし着物を着た様子のとってもいい人で、ぼくが高校で落語をやったときには着物を貸してくれたし、着方も教えてくれましたね、普通だと腹に手拭いを畳んで入れるけど、これを新聞紙にするともち

とキツチリ決まるんだ、とか、耳許で吃りながら言ってくれた声も忘れません。その後、ぼくが役者になつて『弘前劇場』の芝居で博徒の役がついたとき、叔父さんにもらつた着物で出たんです。子供のときは大きい人だなと思つてたけど、寸法を直さずに着られました。粹な人で、身幅を狭く細身に仕立ててありましたね。歩くとき足が割れて格好よく見えるわけなんです。嵐寛あらかん（嵐寛十郎）とか、坂妻さかま（坂東妻三郎）とかの着流しで歩く姿が綺麗だったのも、みんなそういう工夫がしてあつたからなんでしょうね」

木場さんが落語に夢中だったころ、一番好きだったのは御多間にもれず志ん生だったそうだが、いざ自分が弟子入りを志願するとなると、もうちよつと若くて元気のいい小さん師匠を選んだ。

「お弟子にしてください、という手紙を出しましたけど、取敢ず高校を出てからになさい、

つて軽く断られて、それで玄関前に座り込む、といったような情熱はなかったですね。悪き物が落ちたみたいになりまして、それから落語少年変じて映画青年です。大学受験に失敗して浪人生活を送ることになると、予備校の授業料はほとんど映画館通いに消えまして。名画座に入り浸りの毎日で、よくまあ観たな、と思います。年間四百本は観たでしょうね。まさにこれがぼくの大学でした」

観る映画はジャンルを問わず、ゴダールからアンジェイ・ワイダから黒澤明から……何でもござれだった。

映画と言えば小学校低学年のときに観た内田吐夢監督の『宮本武蔵』に強烈な印象があるという。

「初めて妙にエッチな気分になったシーンがあつて（笑）、それ言うたんびに大人に笑われてたんですけど、それは木村功さんの本位田又八の足にヒルが吸いつくんですね、すると木暮実千代さんのお甲が、すかさず自分の

口でその毒を吸い出してはパツと吐き棄てるんですよ。このとき普通のラブシーンではあまり感じないような、エロチックなものを感じましたね。木暮さんて身体もムツチリと大きくて、色白で、脂っこい感じがするでしょ。今思えばそれでかなという気がしますけど、やっぱり男の足にいきなり女が口をつけるというのがあんまり意外だったので、子供ながらにハツとして、それでドキドキしたんでしょう」

映画館が木場さんの大学だったころ、小津安二郎の映画もよく観たが、そのときは取り立てて面白いとも思わなかった。

「どれを観ても何だか同じようだし、テンポはのろいし、つまらなかつたですけど、大人になつてから映画の中でなされている物語の裏側、というのを考えながら観ると、すごく面白かつた。だつて小津作品の中で生き生きと勝手に演技してるのは杉村春子さん一人だけですよ。『東京物語』に出てくる生活に

追われてる美容師の役なんて傑作だったけど、あとの人物はみんな台詞棒読みでしょ。小津作品は一見リアリズムのようだけど決してそうじゃないですから。たとえば、お早うございます、という台詞一つでも、そこに雰囲気を感じられるうちは監督のOKが出なかつた、つて言いますね。棒読みになるのを待ってたんです。だから笠智衆さんなんてまさにぴったりじゃないですか（笑）。原節子さんの芝居だつてワンパターンですからね。小津さんは自分の型にはまってくれる俳優がほしかつたのであつて、個性的な人は杉村さん以外排除されたんだと思います。それにしても、嫁入りを控えた娘とそのお父さんが温泉で一つ部屋に泊まるなんて場面、これもエツチだな、と思つて観ていた覚えがありますね」

木場さんは映画雑誌に載っている映画のシナリオをよく読んでまたその映画を見直してみる、という方法を取ったりしながら、ドラマの何たるかを学んでいった。やがてそれ



下北沢本多劇場でのリサイタルで、『僕は街で生まれた』を熱唱する木場勝己さん（1983年）

が演劇を志す道へと自然につながるようになる。

「あるとき『映画評論』という雑誌の広告欄で俳優学校が生徒を募集していたんです。俳優座のスタジオ劇団がいくつか集って、主体は青年座でしたけど、あと俳小（俳優小劇場）とか、劇団仲間とかが一緒になってできた俳優学校でした。合格の五十人の中に入って、これでまたしばらく遊んで暮らせるかな、と思いましたけど、大学へも行かないと親の免許符が取れないんで、一応明治大学第二文学部の夜間部にも籍を置いて、昼間は演劇の勉強に通ってました」

木場さんが三年間通ったというその学校は、「演劇センター付属青山杉作記念俳優養成所」。その第一期生として三年後に晴れて卒業したが、そのときは五十人いた仲間たちはかなりの少人数に減っていた。

「授業はユニークでしたよ。野村萬斎さんの

お父さんの万作先生が狂言を教えたり、邦楽系のことを教養としてかなり取り入れてました。そのころぼくは神崎流の地唄舞も別に習いに行っていました、『松の緑』とか『神田祭』とか、三つぐらい上げたところでやめましたけどね。演劇の実技のほうは、青年座の森塚敏さんと初井言栄さん（ことえ）とかが教えてくれるんですが、どうも先生があんまりうまくない（笑）、オレの方がうまいんじゃないかと思ったりして」

慌てて「あ、錯覚でしたけど」とつけ加えると、木場さんが鼻に皺を寄せてヒヤッヒヤッと笑う。

そう言えば先日『扉を開けて、ミスター・グリーン』という木場さん主演の芝居を観に行ったとき、客席にいる森塚敏さんを見かけたが、あれは恩師招待だったのか、と思い当たった。

ところで木場さんには養成所時代以来のかなり長期間に及ぶアルバイト経験がある。

「新宿の、ギターの弾き語りを置くような店は今はなくなりましたけど、そういう店に行っていました。自分のステージが終るとお客さんの伴奏をしたり、一杯頂戴したりして、いろいろお話を伺ったりもするわけです。それが非常に生きた勉強になりましたね。わかったことは、お客さんは九割方は自慢をしにくるということなんです。でもただの自慢じや芸がないですから、ちよつと悲惨な自分というのを頭に持ってきて、聞く側は適当に、慰めたり、ときどき茶々を入れたりしながらその自慢を聞く。そう思つて聞くと実に面白いんですよ。ほかのお客さんも競い合つたりね。病院の長期入院患者にしても、刑務所の受刑者にしても、病氣や罪の重いほうが偉いんですね。お互いに、そんなもんじやまだまだ、なんて言い合つてるうちに、相当悲惨な話も笑えるんです。同じ酔っ払いでもいろんなタイプがありますし、誰にも話さない本音を何の関係もない若造にボツリと話す瞬間と

かがあつて、きつとそれなりに晴れ晴れとした感じになるんじゃないですかね。いい勉強になりました」

読売演劇賞の受賞パーティーで木場さんが歌つてびつくりさせられた『座頭市』は、あのころの持ち唄だったと聞いて、やつと納得がいった。あのあと新宿の「かくれが」には、三十年來の御鼠屋さんたちが大勢で待ち受けていて、心からの祝盃を上げてくれたそうだ。

木場さんは今も歌手としてもたまに活動が続けていて、何年かに一回、下北沢の本多劇場や新宿のサンモールでリサイタルを開くという。

「本多劇場でぼくの歌を聴いたさる有名歌手が、その歌唱力にシヨックを受けて廃業した……というのは、ウソですよ（笑）。ぼくのホームページの自画自賛年譜というのに、そんな冗談を並べてストレス解消をはかつてるだけなんです」

本当に茶目つ氣のある人だ。（つづく）

日本酒のことば

日本の日本酒

じかん

その二
冷やおろし
秋上がり

今月も例のごとく、四谷の居酒屋Yにて。ひと雨ごとに寒さがいや増す十月の某夜。一カ月後の公演を控えて、ぱーっと英気を養おうと集まった友人達（劇団『ブラボーカンパニー』の面々）と私の今回のお目当ては、「冷やおろし」です。

その昔から、冬から春にかけて醸造された日本酒（新酒）は、火入れ（加熱殺菌）され、大桶（タンク）に貯蔵されました。それが、夏の土用を越し、初秋の頃になると、大桶の中でほどよく熟成し、酸味がこなれて旨みが出た、やわらかでやさしい味になってくる。また、この時期になると気温も低くなるので、瓶詰め出荷する際の火入れ（加熱殺菌）をしなくてもよくなる。つまり、「生詰め出荷」が可能になる。さらに、瓶詰めでなく樽詰めが一般的だった昔には、この「生詰め出荷」が日本酒の味をより柔らかいものにした。それが秋の爽やかな気候と相まって、日本酒の味を一段とよいものに感じさせた——。とい

うわけで、昔の通人たちは、この時期に出回る日本酒のことを、「冷やおろし」、あるいは「秋上がり」などと呼び、たいそう待ち焦がれたものでした。もちろん二十一世紀になった今も、基本的にはそれは変わりません。しかも、居酒屋Yのご主人さんによると、最近では貯蔵・低温熟成技術の向上のお陰で、醸造段階から一度も火入れ（加熱殺菌）をしない「生々」の冷やおろし。つまり従来の「冷やおろし」の良さと「新酒生酒」のフレッシュさを併せ持つ、昔では考えられなかったニユタイプ（の「冷やおろし」も、かなり登場してきたそうです）。

そんな中から、今回は、三種類の「冷やおろし」をいただきました。一番目は広島県呉市のお酒『九嶺』の純米吟醸・山田錦無濾過生原酒（相原酒造）。二番目は兵庫県宍粟郡のお酒『奥播磨』の播州ひやおろし山廃純米（下村酒造場）。最後は、神奈川県茅ヶ崎市のお酒『天青』千峰・純米吟醸（熊澤酒造）。



藤原理加

○取材協力／東京・四谷「萬屋おかげさん」主人・神崎康敏氏
参考資料／『日本酒の愉しみ』（文春文庫）

その中で、『天青』だけは一度火入れをして
いるのだそうですが、たしかにどれも、フレ
ッシュさを保ちつつ、まろやかでやさしい味
わいがあります。そのあまりのおいしさに感
激した友人の一人がこんなことを言いました。
「たとえれば、最初のお酒は、ペドロ・マル
チネスの剛速球ストレート。二番目のお酒は、
ライトからホームに投げ返すイチローのレー
ザービーム。最後のお酒は、伝説の男、ジョ
ー・デイマジオだ！」

メジャーリーグに詳しい人にもそうでない
人にも何だかよくわからない喻えですが、と
もかくそのすごく嬉しい気持ちだけは伝わっ
てきました。そんな友人の言葉を聞いて、以
前、ある銘酒を評するに「これは、秋のちぎ
れ雲のような味がする」と意味不明の言葉
をつぶやいた別の友人のことを思い出しまし
た。どうやら、おいしい日本酒には、飲む人
をにわか詩人（？）にしてみよう力もあるよ
うです。そうやって、今夜もあつという間に、

大騒ぎの夜は更けてゆきました。「冷やおろ
し」の季節が過ぎると、いよいよ待望の「仕
込み」の季節到来です。早くも来年一月二月
に飲めるであろう新酒にうっとり思いを馳せ
ていると、ご主人のKさんが、こんなことを
教えてくれました。

「そうだ、来週、秋田の女性杜氏さんがウチ
に寄られる予定があるんですよ。仕込みのこ
となど取材してみますか?」「はい、ぜひ!」
というわけで、次回は、日本酒界における
期待の星、若き女性杜氏さんに取材した「杜
氏さん」の仕事にまつわるお話をご紹介します。
予定です。

ふじわりか
フリーランスライター。現在、
『野生時代』（角川書店）『Dom
ani』（小学館）、『ダ・ヴィンチ』
（メディアファクトリー）他で、
小説、映画、演劇、音楽など、
芸術・文化関係のインタビュー
記事を主に執筆。日本酒に関し
ての記事は、『日本酒の愉しみ』
（文春文庫）、『danchu』（プレ
ジデント社）などに執筆。

袖山榮眞 SCREEN

シネマ随想

嘘の三十約

監督 大谷健太郎



六人の詐欺師たち（女二人、男四人）の物語である。詐欺の映画といえば、「仕込み」「引っかけ」から「とどめ」に至るまで七段階に亘って、彼らのお手並みのフルコースを満喫させてくれた『ステイキング』を思い出すが、『約三十の嘘』に、このタイプの饗宴を期待してはならない。

健康食品などの広告の常套手段の一つに「御使用後」「御使用前」の写真を誘示して「御使用中」を中抜きにするパターンがあるが、まさにそれなのだ。

平成17年正月
渋谷シネクイント他、全国ロードショー



たとえば台風の猛威を描写するばあい「筆舌に尽せる」範囲を刻明に辿った上で、「それから最悪の事態が来た」と一旦中断し、廃墟と化した惨状をクローズ・アップして、読者の想像力にフル稼働を迫る手法である。遠くはイギリス海洋小説の珠玉『台風』（ジョゼフ・コンラッド）、近くは日野啓三『天池』における大雷雨が適例である。

コンラッドといえば、フランシス・コッポラの『地獄の黙示録』が、かれの『闇の奥』を「下敷き」にしていることは周知のとおりだが、原作について論じられるテーマの一つに「ホワイト・ライ」（白い嘘）がある。

マローン・ブランド演ずる謎の大佐と同名の核心人物カーツの死を、その婚約者に伝える『闇の奥』の話者が「地獄だ！ 地獄だ！」という最期の言葉を偽って「あなたの名前でした」と言い繕うのが「ホワイト・ライ」であって、手近の辞書には「たわいない嘘・悪意のない嘘」とある。

「人を欺すんじゃないくて、傷つけないため、座を楽しませるためのウソって沢山ある。そんなお芝居をやってみたい」との森光子の言葉に触発され

て小野田勇の書き上げたのが『雪まろげ』だった。一つの嘘をつき通すために次々と重ねられる嘘が、雪の坂道ところがり落ちる雪玉のように制御不能なまでに巨大化する。北原亜以子作、中村梅雀演ずるところの『まんがら茂平次』の愉しさ、切なさ、深さの源泉も「ホワイト・ライ」にある。

詐欺を「なりわい」とするからには、いずれ劣らぬ「ブラック・ライ」の達人揃いであり、札幌を出城に七千万円の純益を揚げた大芝居は終始一貫「ブラック・ライ」で固められていたに相違ないが、この部分が「中抜き」にされている関係上、豪華寝台特急トワイライト・エクスプレス（下り大阪発二時、札幌着九時七分、上り札幌発一四時五分、大阪着二時四三分）車内に限定されたプロットは、「ブラック」「ホワイト」のほかに「ホンネ」までが入り乱れ、文字どおり「虚々実々」の駆け引きが、小ささまざま色とりどりの渦を巻く。

七千万円の札束がギッシリ詰め込まれた白いスーツケースを保管する役が一人。スーツケースを開くキーは五本用意されていて、残りの五人が一

本ずつ確保し、無事大阪に帰着したところで分配する。五本のキーのうち一本だけが本物だが、実際にスーツケースのキー・ホールに挿入するまでは、どれが本物かは分からない。完璧なる「抜け駆け」防止策である。

ところが寸分違わぬスーツケースが、もう一箇（ジャガイモが一杯）持込まれていた！ キーも少なくとも、もう一本！ 「疑心暗鬼」の出番だ。六人の台詞は、表情は、仕草はホントなのかウソなのか？ ウソだとしたら、ホワイトなのか？ ブラックなのか？

古代クレタ島の哲学者エピメニデスが「クレタ人は嘘つきだ」と述べたという。この発言内容がウソなのかホントなのか？ アタマのクラクラしそうな「嘘つきのパラドックス」という蟻地獄のへりに立たされて、確かな手掛りを模索すると、世界に冠たるJRの『時刻表』の厳存に気がつく。前日の一六時一八分洞爺駅発車後新津までノン・ストップで走り続けた列車は、七時五二分富山に停車し、以下、高岡、金沢、福井、京都を経

て大阪に至る。途中下車を企てる人物こそ「プラツケスト・ライヤー」に違いない筈であるが、いやしくもブラックケスト・ライヤーたるもの、そう簡単に尻尾を出すだろうか？

いずれ、ヴィデオかDVD版が出廻るようになってから、何回も何回も「早送り」「巻戻し」を重ねた上で、ホントとウソ、ホワイトとブラックの分析に挑戦してみたい。

* * *

DVD版もヴィデオもないが、忘れられない「中抜き」の名画がある。アニユス・ヴァルダの『幸福』^{しあわせ}（一九六四）である。平凡な大工の一家のピクニックのシーンに始まり、同じシーンに終る。森の美しさも、家族の睦まじさも、ただ一点を除いては全く変りがない。妻―つまり子供たちにとつては母親―が水死し、夫の愛人だった女性が後釜に納まっているのだ。モーツアルトのクラリネット協奏曲K六二二の、明るくしかも哀澄な調べが、生者たちに対して死者との共生を慫慂する。

表紙のことは

11月

流鏑馬

め 11月、さまざまな場所で流鏑馬が開催される。毎年2万人の観客で賑わう、笠間稲荷神社の流鏑馬は11月3日。今年で55回目を迎え、鶴岡八幡宮・日光東照宮と並ぶ、三大流鏑馬の一つに数えられる。

九州の三大流鏑馬は、大隈四十九神社前の宮之馬場、中薩摩吹上の大汝牟遲（おおなむち）神社、曾於郡末吉町 住吉神社。

11月23日の出雲伊波比神社の流鏑馬は、平安時代の後期、源頼義・義家父子が奥州平定の戦勝祈願をし、康平6年（1063）凱旋の途中、八幡宮を勧請し、流鏑馬を奉納したことが起源とされる。

露の身は　ここかしこにて　消えぬとも

こころはおなじ　花のうてなぞ

【法然上人御歌】

露のようにはなくあてないのち。

時も場所も選ぶことなく消えゆくわたしたちですが、
いずれ、極楽の蓮の台でお会いできることを、
心待ちにしております。

「人体」と「ひと」

昨年から今年にかけ、全国数カ所をめぐるかたちで「人体の不思議展」なる催しが開かれている（明年一月十六日まで、東京国際フォーラムⅡ東京都中央区有楽町Ⅱで開催中）。「人体」に特殊な加工を施した「標本」の「展覧」である。かなり非日常的なものであることには違いない。英語では、ズバリ「MYSTERIES OF THE HUMAN BODY」。

人体の内部、筋肉や血管や臓器があらわになった、あまりにストレートな写真を取り入れた電車内の吊広告や駅のポスターは、こう言っては失礼であるが、正直グロテスクに思えた。もつとも、そのような「図」を見るのは決して初めてではない。小学校や中学校の保健室、あるいは理科室などにある、人体の図解や模型を見てきたからだ。ただ、それらは「絵」であり「模型」だった。ところがこの展覧会のポスターは、かつて生命のあった「ひと」そのものの写真である。訴えかけてくる力が違う。その力に押されるように、数日後、歩は会場へと向かっていった。

中に入ると、ものスゴイ人でごった返していた。若い人たちが多い。展覧会という、ふつうは静かに、そーっと見て歩く、といったイメージがあるが、ぜんぜんそんな雰囲気ではない。あちらこちらで、驚きなのか歓びなのか、感歎の声、会話が飛び

交っている。「スキな人が多いんだな」と、自分のことを棚に上げて思ったりした。

展示されている数々の標本を前に、どことなく申し訳ないような、あるいは怖いものを見るような、そんな複雑な思いでとまどっているこちらとは対照的に、多くの人は、それこそ穴をあけんばかりの熱い視線を送っている。釘付けなのである。人体よりも彼等の表情の方に、むしろ興味は移り気味となった。

聞こえてくる会話で納得した。どうやら、医療関係に従事している人たちが多いようだ。

「スゲー！ 授業で習った時はわからなかったけど、〇〇筋の裏側ってこんなふうになってるんだ……」

専門用語がそこから聞こえる、必死でノートをとる人、テキストと見比べている人もいる。

こちらは、人体のメカニズムなどズブの素人。よくわからないながらも、たしかに驚きと発見を数多くいただいて勉強にはなった。ただ、その「人体」はもと生身の「ひと」であったこと、それが目の前にフィルターとなって覆い被さり、結局最後まで、彼らのような冷静な見方をすることができなかった。

この人は、どんな人生を歩んできたのか？―

自ら希望した献体だったかもしれないが、迷いはなかったのだろうか？―

「人体」というメカとしてより、「ひと」としてしかとらえることが出来なかった。

「いのち」の尊さと重みを、強烈に教えられた。もちろん、どのような見方をし、何を感じようが、個々の自由ではあるが。

教育・研究のためにと崇高な志から献体をしてくださった方々に心から敬意を表すると同時に、安らかな後生であらんことを祈らずにはられない。

帰りに購入した図録の「ごあいさつ」のページには「(開催にあたっては) 取扱いその他、暖かい人間性に富む姿勢を貫いてほしいと要望し、失礼のないよう心がけていただきたいとお願いした。ご来場くださる方々もこの点、どこか心の片隅に止めおき下されば幸いである」と記されてあった。

複雑な思いのまま、会場を出た。

(小村 正孝)

法然上人を
めぐる人々

一の谷



中
VIOGAL

◆第十二回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫

(十六)

直実が義経率いる三千余騎の奇襲部隊に組み入れられておりながら、嫡子小太郎直家とともに、先陣の功を立てることを目指して部隊を離れたのには、わけがある。

直実の故郷は武蔵の国大里郡の熊谷郷。田二十町ほどを有する小領主であった。これが配下に家人を多数従える豪族的領主であれば、家人たちを駆使して戦い、その活躍で功名手柄を立てることができよう。だが直実のような小領主は、彼が旗持ちの家来一人を連れて一の谷に向かったのを見てもわかるように、家人の数もわずかで、みずから先頭に立って戦い、自分の手で敵を討ち、その軍功によって先祖から伝えられてきた所領を確保する以外、道がなかったのである。

戦場は文字どおり、彼らの生活がかかった

所領確保の場であり、勢力拡大のまたとないチャンスでもあった。

播磨路から一の谷へと向かう直実の心は勢いこんでいた。

先陣の功を立て、一人でも多くの敵の首級をあげ、それを総大将義経のもとにひつさげて、褒賞にあずかりたい。

彼はそのころ、伯父の久下直光との間に、所領をめぐる争いを起こしていた。生活がかかっているから、これはいつときも思念を離れぬ、頭の痛い問題であった。一の谷の戦場で功名を立てることによって、この所領紛争の問題を一挙に解決しようと、彼は心を燃やしていたのである。

主従三騎は午前五時ごろ、一の谷須磨口に着いた。平家方に物音せず、いまだ源氏の勢一騎も見えなかった。

先陣の願いがかなったのであった。

直実はその証拠を残すために大音声をあげて名乗った。

「話にも聞いていよう。われこそは武蔵の国の住人、熊谷の次郎直実。その子小次郎直家。一の谷の先陣ぞや」

とそれを聞いた平家の陣から、木戸を開いて二十数騎の屈強の武者が駆け出してきた。

これを見た先陣の直実主従、そしてやがて現れた二番手の源氏の武者平山季重主従は、これと火のどるほど戦いに戦い、平家の武者たちは手痛くかけ散らされてざっと城の木戸の中に引き退いた。

とそこへ、七千余騎を率いた土肥の次郎が関の声をどっとあげて押し寄せてきたのである。

配下には秩父、足利、三浦、鎌倉などの大領主クラスの東国豪族、さらに兎玉、猪股、野与、山口、小沢、横山などの武士団が、あ

るいは五百騎、三百騎、あるいは百騎、二百騎と、いろいろの旗をさしあげて、次から次に名乗りあげるや、いっせいに平家の城柵を蹴散らし、城内になだれ入った。

白旗、赤旗は入り乱れ、源平両者がおめき叫ぶ声は山を響かし、馬が馳せちがう音は雷鳴のようである。

敵とひとつに組んで落馬し、互いに刺し違えて死ぬ者、首を取る者取られる者。傷をうけて血をしたたらせながら戦う者もあり、戦いに戦いつつ源平いずれが優勢ともわからぬそのとき、鉄拐ヶ峰を駆け降りてきた義経三千余騎が、どどと背後から一の谷の平家を急襲した。

勝負がついたのである。

まさか千丈の谷めがけて、峰の上から馬で駆け下りてこようとは思わなかった平家は虚をつかれ、総大将の教経をはじめ平家

の軍勢は散り散りになり、あるいは殺されて首を戦場にさらし、落ち武者となつて落ちていった。

(十七)

一の谷の戦場で先陣の名乗りをあげた直実は、合戦のさなか、多くの敵の首級をあげ、あるいは矢や刀で射ち殺したものの、褒賞にあずかるような平家の大物とは出会わなかった。

いくら多数の平家武者を殺したといつても、大物の首級をひっさげて義経の前に名乗りでなくては恩賞はおぼつかない。

直実は焦っていた。

とそのとき、彼の頭にひらめくものがあった。

この合戦でまだ討ち死にしていない平家の公達がいれば、沖に用意している助け舟に乗

ろうと、渚のほうに落ちていくに違いない。

そうだ、渚だ。一の谷の戦場にいつまでもこだわつて、雑兵どもを相手にしていてもはじまらない。渚に行つて、あつぱれ身分のある大將軍が現れるのを待つとしよう。

一の谷のすぐ前は須磨の渚である。

そこに気づくや、彼はすぐに殺戮と混乱のるつぽと化した戦場を離れ、渚へと馬を向けなおした。

彼の予感的中したのである。

渚に急ぐ直実の目に、折りしもざぶつと馬を海に泳がせ、沖に待つ平家の助け舟目ざして落ちゆくとする、ひとりの武者が入ってきたではないか。

練貫ねぬきに鶴の文様を刺繡した直垂ひたれの上に萌黄匂いの鎧を着、連銭れんぜん葦毛あしけの馬に乗った武者の姿は、どうみてもただの平侍とは思えない。



（十八）

望み求めていたよき敵の出現に喜び勇んだ

直実は、とっさに扇を上げて指し招き、

「あれは大將軍とお見受け申す。大將軍ともあろうお方が見苦しくも敵にうしろをお見せになることよ」

と大声で呼ばわった。

ああそんな声など無視してしまえばよからうものを、直実の声を聞いたその武者は、渚のほうを振り返ってそこにわめいている源氏の荒武者の姿を認めると、十五、六メートルほど海に乗り入っていた馬の顔を岸辺に向けなおし、ざざと渚へ戻ってきた。

直実の血は騒いでいた。

義経の配下となって以来今日まで、多くの戦場で多数の敵と渡り合い、切り殺し、射殺してきたこの身が、たかが平家との一騎打ち

などで負けるとは到底思えない。

直実は海からとって返してきた武者が馬ごと渚に打ちあがるや、あつという間に馬上同士で組み合い、組み合ったまま二人は馬から落ちた。

直実はすばやく相手の鎧の袖を取って押さえつけ、首を切ろうとして兜をとって押しつけた。

するとどうか、まだ年のころ十六、七とおぼしい、容顔まことに匂うばかりに美しい若武者であった。薄化粧して、当時貴族の風習であったお齒黒に染め、氣品にみちた容姿である。

これはどうしたことか。

血なまぐさい戦場を喚きわめきつつ駆け抜けてきた直実から、戦場の修羅の世界が遠のいて、一瞬、しんとした別の世界が立ち現れた。

（おお、これは平家の公達であらせられようぞ。年のころはわが子小次郎と同じほどではないか。）直実は思った。

戦いというのは、人の命を奪うことでわが身を立てるといふ、普通の神経ではとうてい耐えられない狂気の世界である。直実も、敵を討ち取って功名を立てることに執念を燃やし、この若武者を組み敷いたのであったが、敵のなかにわが子の面影を見たそのとき、こみ上げてくる愛おしさにとらえられ、彼はこの若武者を討ち取ることができなくなっていた。

（……侍の身分ではよもやあるまい。この直実が小次郎を愛おしく思うように、このお方の父君も、どんなにか愛おしく思っておられよう。この美しさ、健気さはどうだ。お気の毒に。お助け申し上げよう）

馬乗りになって、身体全体でしつかと押さえつけている相手に向かい、刀をしばし控えて彼はいった。

「どういふお方のご子息でいらっしゃいますようぞ。お名乗りください。お助け申し上げます」

相手の首を切ろうと、つい今しがたまでの功名心にかられた心が遠のいてしまった彼は、丁寧な言葉で訊ねた。

「汝はいかなる者ぞ」

若武者は問いかけた。

「名乗るほどの身分の者ではございませんが、武蔵の国の住人で、熊谷の次郎直実と申す者でございます」

（つづく）



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。



浄土誌上句会

●輪

〔特選〕大輪の菊に被せ綿ねんごろに

片桐てい女

重陽の節句の前夜、菊の花に綿を覆ってその香を移しとり、次の日にその綿で体を拭くという、長寿を願う行事だが、まだ続いているのだろうか。「大輪」と「ねんごろに」に、切なる願いが伝わってくる。

〔佳作〕手振りまず合わせ踊りの輪に入る 中島富士子

緑陰に人の輪できて談笑す 伊藤寿美子

ばら一輪グラスに活けし浜の宿 山口 信子

●技

〔特選〕文月や暮れて色めく遊技場

佐藤 雅子

遊技場というと、射的・玉突きなどを思い浮かべるが、今はどうだろう。パチンコ・ボーリングというところか。この「色めく」を

どう受けとるかは読者に任されている。「文月」の「文」も何となく効いている。

〈佳作〉

秋の陽の激しや技師の黒かばん

祐天寺 裕

のら夫の横切る競技場真昼

笹塚 梓

技工士の指細やかに秋深む

井村 善也

●自由題

〈特選〉

新涼のまだこうら若き木魚かな

祐天寺 裕

読経の途中でふと木魚に目がゆく。あまり大きくなく塗りのないのが、何となく人の頭を連想させる。まだ新しいのだろう。「うら若き」が面白い。尼僧のなどと思うとちよつと生臭くなるが、それも面白からう。

〈佳作〉

ひぐらしの声を水色とも思ふ

西原 規夫

磯着千す路地の坂道吾亦紅

谷 しげ子

大震え我に擦り寄る夜台風

山分 志向



自由屋題

浄土誌上旬会の
お知らせ

③季語ではありません

参加作品.....編集部選

輪

鳶の輪にまた鳶の輪や秋麗ら
お十夜や数珠繰りの輪は二た巻きに
一輪の菊ふさわしく母の忌に
月に輪のかかりて明日の吉をふと
年輪の光る花台に秋活ける
灯火親し集うて家族の輪の固し
虹の輪をひろびろと飛ぶ燕かな
輪がちちみ終りを告げる盆踊り

河合富美枝
金谷 友江
大場 清
佐藤 雅子
山本美代子
周東 澄江
増田 信子
浜口 佳春

締切・二〇〇四年十一月二十日
発表・『浄土』二〇〇五年新年号
選者・増田河郎子(「南風」主宰)
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上旬会係

枝

秋稽古鈴証の技をみがくなり
技ありの一声に湧く秋暑の夜
技磨き一生一代菊香る
菊仕立つ菊師の技の仔細かな
竹春や技能士編みし背負篋
和太鼓の技磨かれて能登の秋

今井 恵子
周東 澄江
山本美代子
中島富士子
片桐てい女
河合富美枝

糸瓜咲き壁におばけの影がある
空箱の四隅の暗き厄日かな
撫子や童女のごとく母が在り
鳥の目をして台風に備へをり
パタパタと布団叩くや秋の空
咲きこぼる萩の小径や登校日
黒葡萄恐るるもののごとく喰ふ
愛されし秋の金魚のお腹かな

桜木 勝之
月島 紫野
柏木 貞華
中島富士子
佐藤 雅子
周東 澄江
横浜 裕子
狭山 敏之

さっちゃんねネッ

15 かい目

かまちのしろう



編集後記

野良猫がさがりより来る冬隣り 岱潤

我が寺に上部の片方が完全にすり減り、割れてしまった木魚がひとつあります。今から三十年くらい前に、梅窓院様から、頂いた物です。

梅窓院様の先々代、中島眞孝老師が毎日お念仏をしていた木魚です。

木魚が、こんなにすり減るには一体どのくらいいたいたのだらうと、その当時私はただただ感心するばかりでした。芝学園の校長や、大正大学の教授をされたり、またこれだけ大きなお寺の住職をつとめながら、一体何時こまでお念仏が毎日出来たのだらうと思うと、自分自身の念仏の足らなさを思い知らされ、肝に銘ずる意味で無理を言って頂いた物です。

木魚を潰されたご上人としては、鎌倉

大本山光明寺の先々代藤吉慈海大僧正台

下がよく知られています。台下は夕方になると毎日、離れでお念仏を一時間も二時間もされていたという話を、学生時代よくお聞きしました。そんな台下と同じような方が、市井の寺の中にもいらしたということがとても有り難く、法然上人の念仏が今も生きているという実感を、強く感じる事が出来たのです。

「念仏の声するところ我が遺跡なり」とおっしゃった法然上人を思うとき、まさに東京の青山という都会のど真ん中で、毎日お念仏をされていた眞孝上人は、私たちの範でした。都会寺院として落成した梅窓院様から、これからもお念仏の声が絶え間なく聞こえますことを願っています。(長)

雑誌『浄土』 特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光円寺)
須藤隆仙(両館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
中島眞成(青山・梅窓院)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
眞野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集顧問

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

大室了皓

浄土

七十巻十一月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成十六年 十月二十日
発行 平成十六年 十一月一日

発行人 眞野龍海
編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一
東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八 六九四七
FAX 〇三(三三)五七八 七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七



昭和59年6月号



昭和59年7月号



昭和59年8月号



昭和59年9月号



昭和59年10月号



昭和59年11月号



昭和59年12月号



増刊号 前進座「法然」記念号



昭和60年1月号



昭和60年2月号



昭和60年3月号



昭和60年4月号



昭和60年5月号



昭和60年6月号



昭和60年7月号



昭和60年8月号

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円(別途梱抱料300円)



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円

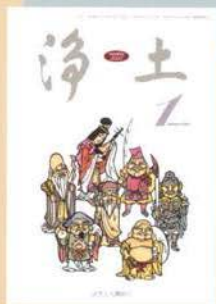


『ブツダ
知れば知るほど』
1,000円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036